

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

きみたちは将来、自分はこんな人間になりたい、こんな仕事についてみたい、という夢を持っていますか？あるいは、すでに自分がなりたいものに向かって、地道な努力をかさねているかもしれませんね。

たとえば、漫画家をめざして、勉強そっちのけでコツコツと漫画を描きためていたり、サッカー選手を夢見てサッカー部に入り、毎日、泥だらけになって練習したり、あるいは海外留学を目標にして、人一倍、英語の勉強に力を入れている人——。

その一方では、漠然とした将来の夢や希望はあるけれど、「どうしたら、その夢が実現できるのかわからない」という人もいれば、自分が何になりたいのかわからず、もたもたしている人だっているでしょう。いや、もしかしたらきみたちのなかには、「将来の目標など考えたこともない」という人のほうが多いのかもしれない。実際、「いのちの授業」をして全国を回っている私は、小学校の子どもたちに「将来は何になりたいの？」とよく質問するのですが、「わからない」と首を横に振る子が意外と多いのです。

この傾向は大学生にもよく見られます。

私が働いている聖路加国際病院には毎年、医学生たちが実習にやってきます。私は毎回、医師の卵たちである彼らに、こうたずねます。

「将来、どんな医師になりたいの？」

すると彼らは、「内科医です」「外科をやりたいんです」とは答えるのですが、かさねて私が、

「では、どの病院の、どの先生のような医師になりたいと思っているの？」

ときくと、きまって困ったような顔をして口ごもってしまいます。どうやら、学生たちは①漠然と医師になりたいと思っただけでも、誰かのような医師をめざしたいとか、医師としてどんな生き方をしたいのかについては、考えたこともないらしい。つまり、彼らには「ぜひ、あの先生のような医師になりたい」という②理想のモデル像が見あたらないまま、なんとなく医師という職業につこうとしているのです。

A、私の中学生時代はどうだったのでしょうか？

実は私も小学校四年生までは、自分が何になりたいかなどと考えたこともなく、「将来はお医者さんになろうかな」という気持ちでわいてきたのは、五年生の終わりごろでした。そのころ、私はある医師に出会い、強い印象が残っていたからです。

小学校四年生のとき、私は急性腎炎という病気にかかりました。急性腎炎は体全体にむくみがでて、食欲が衰えるというやっかいな病気です。そのとき、私を診てくださったのが安永謙逸先生という小児科の先生でした。

先生は、体に変調をきたし不安でいっぱいになっている十歳の私を③「必ず治るから心配しないで」と言葉少なく、しかし、力強く勇気づけてくださったのです。

先生から「動く」と体に悪いから」と言われ、一日中床に横になったままの毎日がつづき、ようやく、体を起こせるようになってからも、外出はかたく禁じられました。おかげで、家の中から一歩も外に出られない生活が三か月もつづき、外で遊び回るのが大好きだった私にとっては、まるでXのような毎日でした。そんなときも、安永先生は往診にこられるたびに、友だちと遊ぶこともできない私をやさしくなぐさめてくださいました。

安永先生の適切な治療のおかげで、私は元気を取り戻し、学校に通いはじめました。ところが、悪いことはつづくもので、同じ年、こんどは母が夜中に突然、全身にけいれんを起こして倒れてしまったのです。前々から患っていた腎臓病が急に悪化して、発作を起こしたのでした。

父は大あわてで安永先生を呼びにやりました。深夜にもかかわらず駆けつけてくださった安永先生は、手早く母を診察して、すぐに注射を打ちました。すると、母のけいれんはおさまリ、ヨウダイも少し安定してきました。

「奥さまは尿毒症です」

先生は心配そうな父に向かって、そう告げました。尿毒症というのは腎臓のbキノウが低下したため、通常尿の中に排泄される尿素などの廃棄物が血液に残存することによって引き起こされる症状です。

B、当時の私はそんなことなど理解できず、ただ、大好きな母親が死んでしまうのでは、という不安と恐怖で、胸が張り裂けそうでした。でもその疑問を直接先生にきくのは、あまりに怖ろしいことでした。私は泣きたくなるのを必死にこらえながら、

「お母さんは助かるの？」

と、たずねてみました。すると、先生は私の目を見つめて、しっかりとうなずいてくれたのです。そのときの先生の自信に満ちた態度に接して、私はどれほどホッと、勇気づけられたことでしょう。実際、ほどなくして母の体調は元に戻ったのでした。

そうした体験が強烈に印象に残っていたので、私は「できることなら安永先生のようなお医者さんになりたい」と、ごく自然に思うようになったのです。

C、きみたちが「将来、自分がどんな人間になりたいのかわからない」と思っているなら、「できることなら、自分はこの人のようにになりたい」という手本となる④モデルを見つけてほしいと思います。

きみが将来、プロ野球選手をめざしているのなら、「イチローみたいな選手になりたい」でもいいでしょう。キュリー夫人の伝記を読んで感動して「ばくも科学者になりたい」というのもいいし、看護師として働いているお母さんの姿を見て、「わたしも働きながら子育てをする女性になりたい」というのもすばらしいと思います。

私がきみたちにモデルを見つけることの必要性を説くのは、理由があります。

それは、人間が「自分一人だけの考え方で生きていく」ということは、とてもたいへんだからです。

こうなりたい、と思える人のまねをする、つまりモデルがいると、多くのことを学べます。でも、まねごとのまねでは、自分自身がなくなってしまうからです。

目的の見えない人生というのは、真っ暗な闇の中を手さぐりで進んでいくのに似ています。しかし、自分がめざすモデルがいれば、人はそのモデルを目標にして前に進むことができるのです。

まだ、cジシヤクのない時代、旅人たちは夜空の星を頼りに目的地へ向かったといひます。モデルとは暗い夜空に輝く星であり、先がよく見えない「人生」という暗闇を照らす⑤一条の希望の光のようなものです。

(日野原重明「15歳の寺小屋 道は必ずどこかに続く」より)

問1 二重傍線部 a「ヨウダイ」、b「キノウ」、c「ジシャク」と同じ漢字を含むものを次のア～オの傍線部の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

a 「ヨウダイ」 ア カヨウキヨクを歌う友達。

イ
怖いヨウカイが出てくる話。

ウ 気体のヨウセキを量る。

工 理科の授業でスイヨウエキを作る。

オタイヘイヨウを航行する船。

b
「キノウ」

ア この試合の敗戦がノウコウになる。

イ
クノウの日々が続く。

ウ 器具をシユウノウする部屋。

工 牧場でラクノウ一筋に生きる。

オ　ホウシャノウの影響を受ける。

C
「ジシヤク」

ア
シャクドウイロに日焼けした顔。

イ
デンコウセツカの早わざ。

ウ この件でのシャクメイを求める。

エ イツチヨウイツセキにはうまくいかない。

今年の冬はセキセツリヨウが多い

問2 傍線部①「漠然と」及び、⑤「一条の」の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

①「漠然と」 ア　じつくりとおちつきはらっているさま

イ
しつかりと考え、きちんとしているさま

ウ　どうでもよく、なにも思っていないさま

工 ぼんやりとして、とらえどころがないさま

オ はつきりせず、迷っているさま

⑤ 一条のし

ア　ひとすじの
イ　ひとくたりの
ウ　ひとにきりの

エ　ひとまわりの　オ　ひとわたりの

問3

A

 $\rightarrow$

C

 に入れるのに最も適当なことを次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

ア なぜなら
イ また
ウ では
エ もちろん
オ もし

問4 傍線部②「理想のモデル像」について、「モデル」を比喩的に言い換えている漢字一字の語を本文中より二つ抜き出して答えよ。

問5 傍線部③「『必ず治るから心配しないで』と言葉少なく、しかし、力強く勇気づけてくださった」とあるが、それと同じように「私」を勇気づけてくれた「先生」の行動を示す部分を二十五字以内でさがし、解答欄の形式に合うように抜き出して答えよ。

[illegible]

問 6

X	に入れるのに最も適当なことを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。
---	-------------------------------------

夢心堪
理不尽
工
拷問
才
極樂

問7 傍線部④「モデルを見つけてほしいと思います」について、この部分の筆者の考えを説明せよ。

の(A)と(C)に入れるのに最も適当な語句を本文中から抜き出して答えよ。

人間は（A）だけで考えて生きていくことは大変であるから、モデルの（B）を

で多くのことを学び、そのモデルを（C）にすることで進んでいくことができるということ。

問8 本文中からうかがえる筆者の考え方と同じ考え方をしているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 私は新聞記者になりたいと考え、毎日欠かさず新聞記事からあらゆる情報を手に入れようと努めている。

イ 僕はテレビ番組で紹介されたある技術者の生き方や考え方を知り、その人に少しでも近づきたいと頑張っている。

私はテレビの画面を通じて華やかな芸能界の世界にあこがれ、歌手になりたいと一生懸命に歌の練習をしている。

工 僕は僕自身にとつて一番身近な存在である両親の地道な生き方とはまったく違^{ちが}う、自由な生き方を常に探し求めている。

オ 私はまだ自分の目標が定まっていなかったので、いろいろな機会を通じて数多くの人と接するよう心がけている。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の都合上、表記を変更した部分があります。

(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

東京の町なかを網の目のように都電が走っていた時代のことは、もう余り知る人がいない。

ただか三十年前の話のだけれど、その間たくさん人口が流入し、それと同じ数だけの先住者が代謝してしまっただけで、昔を知る人がいなくなったのだから。

唯一、早稲田から三ノ輪橋まで、文化財のような路面電車が動いているが、あれはもともと交通の障害にならないような場所を選んで走っていた路線だから、今さら乗ってみたところでさほど往時の雰囲気を感じることができない。ともかく、僕の子供のころには、東京中の道路という道路に、おそらく世界最大のネットワークであったにちがいない都電が、①黄色い箱を並べて走り回っていた。

にもかかわらず、オリンピック開催を前にそれらが次々と撤去されたとき、たいした反対運動も起きなかったのは、つまりAというやつだったのだから。

足回りもくそも、当時の都電はすでに誰から見ても、のろまで不格好で、自動車の障害物でしかない厄介者になり下がっていた。

傲岸な明治生まれの写真師であった祖父は、最後までたったひとりの闘争を続けていた。

地下鉄日比谷線の開通とバス路線によって、以後の住民生活は完全に保障されていたから、都電廃止に反対する合理的な理由は何ひとつとしてなかった。だから祖父が勝手に六本木の交差点で配布していた「ちんちん電車」なるガリ版刷りのチラシも、ぜんぜん説得力に欠けていた。それどころか、町にゴミが増えると、商店街から苦情を言われたことさえあった。

祖父はそのころ、すでにボケ始めていたのだと思う。

家庭用のカメラが普及してしまっただけで、写真館などという商売は成り立たなくなっており、一家の生計はフィルムと現像で支えられていた。

父は入婿だった。僕の勝手な想像だけれども、親方の娘と弟子のひとりが惚れ合ったとか、かつて大勢いた弟子の中から器量を見こまれたとか、そんなきれいな話ではあるまい。生来がBで、ぼんやりと「芸術写真」を撮ることはばかり考えていた父は、要するに逃げ遅れた弟子だった。

父はいちおうは伊能写真館の主、「二代目伊能夢影」であるが、仕事らしい仕事といえれば七五三のお宮参りと小学校の学級写真ぐらいなもので、一年の過半は旅に出て意味不明の風景写真を撮り歩いていた。

しかし、そんな父と祖父の間にはふしぎなぐらい諍いがなかった。それはたぶん、一人息子の僕が「三代目伊能夢影」を強要されなかったことと、理由は同じだろう。要するに、家業の未来について議論するだけの値打ちを、僕の家はすでに喪っていたのである。

麻布十番の古ぼけた写真館は、時代の要請というCのラップにくるまれて、なるようになるほかはなかったのだ。

(中略)

その年のクリスマス・イブを、僕は去年の出来事のように思い返すことができる。

朝っぱらから、三聯隊の跡地に進駐していた注1 G Iが二人、ぎよっとするような盛装をして写真を撮りにきた。予想もせぬ事態だったが、おそろしく手先が器用で凝り性の父は、スタジオをすっかりクリスマスのムードに造りかえており、G Iは「ワンダフル」を連発した。

当時家族は祖父がしゃしゃり出ることを警戒した。しかし祖父は、スタジオの隅にいかにも「師匠」という感じで立つたまま、黙って父の仕事ぶりを観察していた。上機嫌の客を父が店の外に送り出すと、祖父は仏頂面で注2 ベンタックスのファインダーをのぞきこみ、撮影中に父がさかんに使っていた露出計を手にとつて、何だか原住民が文明のa リキでも見るように、②ためつすがめつながめていた。

祖父が父の機材に興味を示すのはまったく初めてのことだった。スタジオに戻ってきた父が説明しようとする、祖父は面白くもおかしくもない顔のまま、「こんなものに頼ってばかりいるから、いつまでたつたってコンテストに受からねえんだ」と悪態をついた。

父は毎年、新聞社の主催する写真コンテストに作品を応募し続けていたのだった。

鳥居坂の屋敷町の森が夕日に染まるころ、家族はひどく大げさな家で家を出た。

母は正月用の紬をおろし、僕に新しいセーターを着せた。父は撮影旅行のときと同様に、例の従軍カメラマンのような格好で、おびただしい機材を背負った。ひとめ見たなり祖父は、「てめえ、弁慶か」と、また悪態をついた。

そう言う祖父の出で立ちとはいえば、皿の異様にでかいハンチングをかぶり、ツイードの背広に蝶ネクタイを締め、丈の短いニッカボッカをはいていた。久しぶりに見る写真師の正装に、家族はみな呆れた。僕と母は笑いをこらえるのに必死だったが、父は妙に目の据わった真顔で、「少なくとも、Dには見えませんが」と厭味を言った。

店を出ると、祖父は世界を測るような感じで、簾のステッキを夕空に向けて振った。チョッキのポケットから、その昔宮様から拝領したとかいう懐中時計を取り出して時を見、胸にさげた注2 ライカを商店街のアーケードに向けて構えた。

「ミエ切ってるつもり」と母が笑いを苦しげに噛み殺しながら囁いた。

③「墓地下がいいな」

と祖父は言った。これには全員が仰天した。近くの六本木の交差点か一の橋の停留場で花電車を待つものだとばかり思っていたのだ。それにしたところで多少は近所の目を気にしなければならぬのに、祖父のそのなりで遠い墓地下まで歩かれてはたまらなかった。なにしろ祖父は、藪では何を言われているかわからない、界限でただひとりの都電廃止反対運動者なのである。

次代を担う家族は、④妙な語りぐさを残したくない一心で祖父を流しのタクシーに詰めこんだ。

⑤にっちもさっちもいかないう交通渋滞の窓から、祖父はぼんやりと、移ろい行く故郷のイルミネーションを見つめていた。

僕らはひとけのない墓地下のカーブで、用にあふえながら花電車を待った。

そこはまったく写真撮影に適さない場所だった。第一に、街灯のほかの灯りがない。後ろは青山墓地、向か

いは米軍キャンプである。しかも四方を繁みに囲まれているそのあたりは、霞町の名の由来のごとく、夜更けとともに霧がわく。何よりも、停留場も交差点もないカーブを、都電は全速力で駆け抜けるのである。

「青山一丁目の方が、よかないですか」

と、父は機材を出したためらいながら言った。

「よかねえよ。おらアここしかねえって、せんから決めてるんだ」

凧にかき乱された霧が、街灯の輪の中で渦を巻いていた。父が仕方なしに機材を広げる間、祖父はステッキに両手を置いて、キャメルを唇の端でかんだまま、真剣なまなざしをあたりに配っていた。

まさかと思う間に、ちらちらと雪が降ってきた。

「やっぱ、むりですよおやさん——」

「けっこうじゃあねえかい。ほれ、おめえの尊敬する何とかいうベトナムのカメラマンは、鉄砲の弾ん中でシャッターを切ったんだろう。あれアいい写真だ。おそらく奴ア、弾が飛んでくるたんびに、しめたと思つたにちげえねえ。プロつてえのア、そうじゃなきゃならねえ」

「そりやま、そうですけど……」

心のやさしい父は、ここまで準備を整えた祖父の一世一代とも言える写真が、無残な結果に終わることを惧れたにちがひなかった。

それからしばらくの間、父はE祖父を諫め続けた。祖父は頑として譲らなかつた。真摯な師弟のやりとりに、僕や母の口をはさむ余地はなかつた。

結局、父はbゴウジョウな師匠に屈した。

「せめて、こつちを使っちゃくれませんか」

父はフラッシュをセットしたペンタックスをさし出した。

「いや、俺のを使う。ただし、おめえもそつちで、同時に注ストロボを焚け。合図は昔と同じだ」

わずかの間に、雪はほぐれ落ちる真綿ほどの大粒になっていた。祖父は掌でライカのレンズをかばいながら、父の立つべき位置をc指図した。

深いしじまの中で、都電の警笛が鳴った。隣りの新龍土町の停留場を発車したにちがひない。道路の向こう岸には、いつの間にか大勢のG-Iが見物にやつてきていた。

「おじいちゃん、写せるかなあ。ストロボ替えてる暇なんかないよ。ここ、すごいスピードで来るんだ」

母は答えずに、じつと夫と父の仕事を見つめていた。

ストロボは一回で焼き切れてしまう。玉を替える間などあるわけはないから、写真は一発勝負だった。

祖父はハンチングの底を後ろに回し、街路樹の幹に肩を預けた。両肘をぐいと締め、何度もファインダーを覗きながら足場を定める。ふだんの老耄した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた。

一方の父も真剣だった。指示通りに少し離れた場所で三脚を開き、毛糸の帽子を脱いでカメラをかばっている。

緊密な時間が刻まれた。雪を吸って真黒に濡れた道路に、水銀を流したような二本の線路がはるかな弧を描いていた。

母が背中から僕を抱きすくめた。僕の鼓動と同じくらい、母の袖の胸は高鳴っていた。花電車が来た。

向こう岸のG-Iたちから、いつせいに喝采と指笛が起こった。

全速力でカーブに現われた花電車は、クリーム色のボディが見えないほどの造花で飾られ、フレームには目もくらむほどの豆電球を明滅させていた。ヘッドライトの帯の中に霧が渦を巻き、轍からは雪が吹き上がった。

「まだっ！ まだまだっ！」

祖父が怒鳴った。

「いいかつ！」

「はいいつ！」

ひと呼吸おいて、祖父は木遣りでも唄うような甲高い合図の声を張り上げた。

「ああちち！ ねええっ！ さん！」

一瞬、夜の底に焼きつけられた都電の姿を、僕は一生忘れない。

二台のストロボと同時に、都電のパンタグラフから稲妻のような青い火花が爆ぜた。真昼のような一瞬の閃光の中で、電車はそのまま止まってしまったように見えた。

しかし、都電は警笛を鳴らし続けながら、全速力で僕らの前を通過していたのだった。豆電球に飾られた運転台に、注順ちゃんがd無愛想な顔でつつ立っていた。

母が、ほうつと息を抜いた。

「あつち、ねえ、さん、だつて。久しぶりで聞いたわ」

「あつちねえさん。おかしいね」

僕と母は芯の折れたように屈みこんで、大笑いに笑った。

都電が行ってしまったからも、祖父と父はファインダーから目を離さずに立っていた。

少し間を置いて、向こう岸からG-Iたちの喝采が上がった。それはカメラマンたちに向けられた賞賛に違ひなかった。祖父はようやく身を起こし、ハンチングを粹に胸前に当てて、

「サンキュー・ベリマッチ！」と答えた。

「撮れたの、おじいちゃん」

僕は祖父に駆け寄った。

「⑥焼いてみりゃわかる。まちがったって暗室のドア開けたりすんじゃないぞ」

祖父はライカをケースに収めると、ツイードの背広の肩に斜めにかけ、雪と霧に染まった墓地下の舗道を、さつさと歩き出した。

「気が済んだかな」

三脚を畳みながら、父がF言った。

祖父は誇らしく胸を反り返らせ、無愛想に、まるで花道をたどる役者のような足どりで、雪の帳の中に歩みこんで行った。

その夜、僕と父は夕飯もそつちのだけで暗室にこもった。

赤ランプの下の父の顔はいつになく緊張していた。

「おとうさんのフィルムは？」

父は「G」言った。

「ペンタックスのフィルムは抜いておいた」

「え、どうして？」

「ペンタックスが写っていて、ライカが真黒だったら、おじいちゃんガッカリするだろう。おとうさんの方は失敗してたことにしとけ」

「おとうさん、やさしいね」

「おじいちゃんは、もっとやさしいよ。較べものにならないくらい」

話しながら、僕と父はあつと声を上げた。現像液の中に、すばらしい花電車の姿が浮かび上がったのだった。

「すごい、絵葉書みたい」

父は濡れた写真を目の前にかざすと、唇を慄わせ、「H」溜息をついた。

「信じられねえ……すげえや、こりゃあ」

暗室から転げ出て居間に行くと、祖父と母は勝手にケーキを食っていた。

父と僕のあわてふためくさまをちらりと見て、祖父はひとこと、「メリー・クリスマス」

と言った。家族が大騒ぎをしている最中にも、まるで当然の結果だと言わんばかりに、焼き上がった写真を見ようとしなかった。

「まあ座れ。戦に勝ったわけでもあるめえに、万歳はねえだろう」

僕は尊敬する写真師、伊能夢影を中にして、炬燵にかしこまった。

まったく芝居のように長い間をとって紅茶をすすり、キヤメルをつけてから、祖父は言った。

「ベトナムのカメラマンはうめえよ。俺よりやちよいと下がるが、おめえよりかはうめえ」

「当然です、おやじさん」

と、父は「I」答えた。

「なら、なぜおめえがへたくそか、わかるかえ」

「機材に頼るから、でしょうか」

「いいや、そうじゃあねえ。少なくともおめえのペンタックスは、俺のライカより優秀なカメラだ。あの露出を計る機械にしたって、あるのとねえのとじゃあ、大違いだろう——要は、ここだ」

と、祖父は丹前の胸に掌を当てた。

「きれいな景色を撮るのもけっこうだが、景色にや感情でえものがねえ。おめえの撮る写真は、道具さえ揃や誰だって撮れる。つまり、⑦おめえはやさしさが足んねえ」

はあ、と父は押し黙った。

(浅田次郎『青い火花』より)

注1 GI・・・アメリカ軍の兵士。当時、日本に数多く駐留していた。

注2 ペンタックス、ライカ・・・共にカメラの名称。この場合、ライカの方が旧式である。

注3 キヤメル・・・タバコの名称

注4 ストロボ・・・写真撮影用の閃光発生装置

注5 順ちゃん・・・都電の運転手。祖父とは昔からの知り合い。

問1 二重傍線部a「リキ」、b「ゴウジョウ」のカタカナを漢字に直し、c「指図」、d「無愛想」の漢字に読みをひらがなで答えよ。

問2 傍線部①「黄色い箱」に用いられている技法として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 体言止め エ 直喩 オ 隠喩

問3 傍線部②「ためつすがめつながめていた」、⑤「にっちもさっちもいかない」の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

②「ためつすがめつながめていた」

ア 何度でも繰り返して見ること イ いろいろな方向から見ること

ウ 思い出したように見ること エ 集中して一心不乱に見ること

オ 気乗りせず仕方なく見ることに

⑤「にっちもさっちもいかない」

ア 見るものすべてに変化がない イ 大げさすぎて話にもならない

ウ 情けなくどうしようもない エ 物事が行き詰まって動きがとれない

オ 進退窮まって後戻りができない

問4 Aに入れるのに適当な語句五文字を本文の(中略)以前の文中からさがし、抜き出して答えよ。

問5 B、Cに入れるのに最も適当な四字熟語を次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

B ア 新進気鋭 イ 明朗快活 ウ 優柔不断

エ 前途洋々 オ 大胆不敵

C ア 問答無用 イ 賛否両論 ウ 前代未聞

エ 日進月歩 オ 榮枯盛衰

問6 Dに入れるのに適当な語句を文章の流れから考え、漢字三文字で答えよ。

問7 傍線部③「墓地下がいいな」について、祖父がこのように言った理由を説明した次の文の(X)・(Y)に入れるのに適当な語句を()内の字数の指示に従って文中から抜き出して答えよ。

墓地下は(X 四字)には似つかわしくない場所であったが、そこを通過する電車は(Y 三字)で通り過ぎるため、そこがかつて持っていた都電の往年の力を存分に発揮できる唯一の場所であると祖父は考えたから。

問8 傍線部④「妙な語りぐさを残したくない」とは、この場合どのようなことに対して表現されたものか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 常に好奇の目にさらされ続けている祖父の言動が、今後ますます大きく取りざたされるであろうと予想できるということに対して。

イ いつも陰口を叩かれていた祖父への評価が、今回のプロらしい格好で一気に逆転し、いつまでも語られ続けられるということに対して。

ウ 近所でとかく噂されている祖父の言動に、今回の奇妙な格好への評価まで加わり、いつまでも話の種にされ続けるということに対して。

エ 常に近辺からの支持を集めている祖父に、プロのカメラマンの出で立ちをしたという新しい伝説が付け加えられるということに対して。

オ 普段からあまりかえりみられることのない祖父の言動が、今回の格好で一躍注目を浴びるようになるということに対して。

問9 E I に入れる語句として適当なものを次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

ア 誇らしげに イ 悲しげに ウ 少し迷ってから
エ 胸のつぶれるほどの オ 心の底から

問10 傍線部⑥「焼いてみりゃわかる」について、「焼く」とはこの場合「写真を現像する」という意味だが、そこにかがえる祖父の気持ちとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 安心しきった気持ち イ 自信に満ちあふれた気持ち
ウ 期待に満ち満ちた気持ち エ 無責任に投げ出す気持ち
オ やけっぱちになった気持ち

問11 傍線部⑦「おめえはやさしさが足んねえ」とあるが、この部分で祖父が言いたかったことを説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア カメラを扱うときには、人にやさしく接するときと同じように、きめ細やかな心配りが基本になるということ。
イ 花電車を撮影するには、一瞬のチャンスを逃さず、いかにその美しさを引き出すかがポイントだということ。
ウ 一家の主人として家族を大事にするという時には、年長者に対しては特に気を遣うべきであるということ。
エ 写真を撮るためには、機材や技術に頼るのではなく、対象に対する愛情の深さが必要であるということ。
オ 人と接するときには、カメラを大事にする気持ちと同様に、思いやりの心が大切であるということ。